
My Sweet Darling?

R-third

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sweet Darling?

【Nコード】

N3216L

【作者名】

R - t h i r d

【あらすじ】

男勝りな女の子、岸边 紗和の家は、街で人気のケーキ屋さん。高校の友人達には内緒で、愛らしい制服を着て自宅の手伝いに明け暮れる毎日。

そんなある日、クラス一のモテ男、内藤 陸が客としてやって来て…。

毎月一話の予定で、ケーキをテーマにした甘々恋愛小説を書いてみる事にしました。

あまり後先を考慮してはおりませんが（おいっ！）、取り敢えず
ターゲットです！

ブログ 招かれざる客（前書き）

毎月、一話の更新予定です。

まったりペースですが、よろしく願います

プロローグ 招かれざる客

「ねえ、紗和ちゃん！今日もまた、家のお手伝いな訳？」
クラスメイトの美月が、唇を尖らせて言った。

「ごめんね、美月。」

だって父さんが、家を手伝えって五月蠅くってさあ！」
私はショートカットの髪をガシガシと掻きながら、答えた。

「ちえっ、詰まんないのっ！」

でもさあ、紗和ちゃん。いい加減、教えてくれてもいいじゃない？
…紗和ちゃんの家って、一体何処にあるの？」

彼女は愛らしく小首を傾げ、聞いた。

私は時計をちらりと確認して、それから言った。

「…ごめんね、美月。」

私、今日も超急いでるからっ！

じゃ、また明日ねっ！」

そして私は、慌てて教室を駆け出した。

背後からは美月の非難する声が聴こえて来ていたけれど、そんな事に構ってはいられない。

…だってあんな格好、学校の友達に見られる訳にはいかないってのっ！

家に着くと私は、いつもの様に店の制服に着替えた。

お世辞にも私に似合っているとは言えない真っ黒なそのワンピース

は、愛らしいレースで飾られている。
しかもご丁寧に、ふりふりの真っ白なエプロンまでセットされている始末。

私の家は近所では割と評判の、ケーキ屋さんだ。
その為私は毎日、ただ同然で両親に扱き使われている。

とはいえ私はこの仕事が心底嫌いなわけではなく、ケーキ作りに関してのみにいえば、かなり楽しんでやっているとさえ言えよう。

まあでも私が作らせて貰えるのは、今のところ比較的簡単なクッキー位なものだけだ。

『カラン カラン！』

ドアの方を見ると、長身の男性客が一人、店内へと足を踏み入れた。

男性にしては少しだけ長めの、艶やかな黒髪。

程良く焼けた、小麦色の肌。

高い鼻と、少し分厚めだが形の良い唇。

そしてキラキラと輝く、切れ長の瞳。

…って、おいつ！

あれ、同じクラスの内藤 陸じゃんつ！！！！

私はかなり動揺しながらも、顔を隠すため少しだけ俯いた。

キョロキョロと店内の商品を物色しながら、ヤツが少しずつ私のいるレジ付近に接近してくる。

大丈夫だっ！落ち着け、私っ！

ヤツはケーキ選びに夢中で、店員が私だとはまだばれてないっ！

内心激しく動揺しながらも、私は接客用の営業スマイルを浮かべた。

「えっと…。ミルフィーユ3個、お願いします。」

内藤は心底嬉しそうな笑顔で、注文した。

「…畏まりました。」

では、少々お待ち下さい。」

…ミルフィーユ。

あのクールなモテ男、内藤が毎のミルフィーユだってっ！！！！

吹き出しそうになるのを必死に堪えながら、私は少しだけ声色を変えて答えた。

そして私は後ろを向き、ケーキを箱に詰め始めたのだけれど。

…その時運悪くアルバイトのはなちゃんがやって来て、私に声を掛けた。

「紗和ちゃん、お疲れ様です。」

今日も一日、よろしくお願いしま〜す！」

…つつ、勘弁してよ、はなちゃんっ！！！！

するとこれまで全くこちらを見る事がなかった内藤が、ハツとした表情で私の事を見上げた。

「…岸边？」

啞然とした表情でそう呟くと、次の瞬間ヤツは腹を抱えて爆笑した

…。

【5月】 始まりの、ミルフィーユ 〈side SAW〉

はなちゃんに着替えに行った後も、内藤はまだ笑い続けている。

「五月蠅い、内藤っ！」

アンタの方こそ、どうしたのよ？

こんなに遠くまで、わざわざケーキを買いに来るだなんて。しかもミルフィーユばかり、3個って…。

アンタ、ミルフィーユマニアな訳っ!？」

すると彼は、かなり狼狽した様子で言った。

「なっ!!!余計な御世話だっ！」

俺がミルフィーユを何個食おうが、俺の勝手だろうがっ!!!」

「何よ、内藤。」

…まさかそれ3個とも、マジで一人で食べる気だったの？」

幾分呆然としながらそう聞くと、内藤は真っ赤な顔で酸欠の金魚の如く口をパクパクさせた。

…その顔はいつも教室で見かけるクールなヤツからはかけ離れていて、めっちゃくちゃ可笑しかった。

成程ね。

男が一人でケーキ屋に来るのが恥ずかしいから、わざわざ隣町までやって来たって訳か…。

それに気付いた私は内藤の方を真っ直ぐに見据え、ニヤリと笑って言った。

「ねえ、内藤。」

…クラスの皆にはこそそとケーキを買いに来た事、言われたくないわよねえ？」

するとヤツの顔が、一瞬のうちに真つ青になった。

私は吹き出しそうになるのを必死で堪えながら、笑顔で告げた。

「いいわよ、内緒にしてあげても。」

ただしひとつだけ、交換条件。

…私の家がケーキ屋で、しかもこんな服着て手伝わさせられてるって事、絶対に内緒にして頂戴。」

すると彼はまた吃驚した様に切れ長の瞳を見開き、それから言った。

「えっ？家の手伝いって…。」

「ねえ、内藤。アンタこの店の名前を見ても、まだ気付かない？」

…ホント、鈍い男ねっ！

まさか私が好き好んで、こんなメイドみたいな恰好をしてるのも思ってたのっ！？」

そして私は、ヤツが買ったケーキの入った箱を差し出した。

すると内藤は慌ててケーキの入った箱を見詰め、愕然とした表情のまま呟いた。

「『PATISSERIE KISHIBE』…。マジかよ。」

…此処って、岸边の家だったんだ。」

それからヤツはとっても嬉しそうに笑い、言ったのだ。

「じゃあ今度から、遠慮なく買いに来れるじゃんっ！

だって俺のケーキ好き、岸边にはもうばれちゃったんだからさあ

」

「…はあああつ！？」

私はその言葉に驚き、大声を上げた。

すると厨房から母さんが出て来て、言った。

「ちよつと、紗和！

お客様の前で、何大きな声を出してるのっ！？」

すると内藤はさっきまでとはガラリと態度を変え、いつもの様に紳士スマイルを浮かべて言った。

「はじめまして。僕は彼女と同じクラスの、内藤です。

すみません。僕が岸边さんを驚かせてしまったものですから。」

…一体誰が、『僕』だつて？

さっきまで内藤、自分の事を『俺』って言ってたじゃんっ！

しかしヤツの笑顔を見た母さんは、ほんのりと頬を染めた。

「ふざけんじゃないわよ、内藤っ！

もう二度と、うちの店には来ないでよねっ！！」

私はまた、叫び声をあげた。

しかし内藤は何処吹く風で、静かに微笑んだ。

「ちよつと、紗和っ！」

クラスメイトとはいえ、お客様に対して失礼でしょうっ！

ごめんなさいね、内藤君。

またいつでも、買いに来てね。」

それから母さんは、おまけだと言って新作のチョコクッキーをヤツに手渡した。

…内藤は、いいんですか、とか言いながら、ちゃっかりとそれを受け取った。

「ちよつと、母さんっ！」

そんなヤツにサービスなんか、する必要無いわよっ！

勝手に私の作ったクッキーを、内藤なんかにやらないでっ！」

私は慌ててそう言ったのだけれど、内藤はちよつと驚いた様な表情に変わり、それからニヤリと不敵な笑みを浮かべて言った。

「…へえ。これ、岸边さんが作ったヤツなんだ。

…それは、味わって食べないとね？」

「…なっ！？ふざけんじゃないわよ、内藤っ！」

さっさとそれ、こっちに返しなさいよっ！」

しかし次の瞬間、内藤はまた胡散臭いくらい爽やかに微笑み、言った。

「ありがとっございました。

じゃあ、また来ますね！」

そしてヤツは会計を済ませると、ご機嫌で店を後にした…。

【5月】 始まりの、ミルフィーク side RIKU

店を出た後も俺は笑いを堪える事が出来ず、ひとりでニヤニヤしながら帰路に着いた。

あの同じクラスの岸部 紗和がケーキ屋の娘で、しかもあんな制服
って。

…有り得ない、有り得なさすぎるだろうっ！！！！

といつても別に、彼女にあの制服が似合っていないなかった訳ではない。
ただいつもとのギャップが余りにも凄まじくて、それが可笑しかった
ただけなのだが。

それに寧ろ彼女のあの姿は、意外性はあったものの、客観的に見れば
かなり魅力的なモノだった。

粗野な言動の為普段は見落としがちだが、良く見れば岸部はかなり
整った顔立ちをしている。

まあでもそれに気付いたのは、今日のあの姿を見たからなのだけ
れど…。

俺が最初全く気付かなかった程、その姿は違和感がなかった。

高校指定のジャージか制服しか見た事がなかったけれど、愛らしい
黒のワンピースとふりふりのエプロンは、小柄な彼女には本当に
く似合っていた。

しかもいつもは割と乱雑な雰囲気の色茶色のショートカットも、今日
はメイドみたいな可愛らしいカチューシャで飾られていたし。

…正直に言おう。

迂闊にも俺は最初、そんな姿の彼女に瞳を奪われてしまったのだ。

しかしそれを彼女に気付かれるのが少し恥ずかしくて、ケーキ選別に熱中している振り続けた。

…お目当ての品は最初から、苺のミルフィーユと決まっていたのに。…なのにあの美少女が、同じクラスの野蛮女子、岸部 紗和だったとは。

そこまで考えて俺は、再びプツと吹き出した。

「…マジで、やられた。」

俺は不審者の如くひとりでクスクスと笑いながら、家の玄関のドアを開けた。

そして台所に向かい、さっき買ったケーキの箱を開けた。

中には購入したばかりの苺のミルフィーユと、岸部のお袋さんから貰ったチョコクッキー。

俺はまずミルフィーユをひとつ取り出して、手掴みでガブリとそれに齧りついた。

サクサクのパイ生地も、程よい甘さの生クリームも、間に挟まれた苺のソースも、どれも絶妙なバランスで。

「…うまつ！流石は今話題の店の、ミルフィーユだな。」

俺はその味に感激して、思わずそう呟いた。

ケーキ屋というのは女性のもの、というイメージがある為、今日岸辺に指摘されたとおり、恥ずかしくて家の近くの店にはなかなか入り辛い。

でも今回あの店に行った理由は、実はそれだけではなかった。

ただ純粹に、最近話題の『PATISSERIE KISHIBIE』の苺のミルフィーユを、どうしても食ってみたくなったからだ。

それに彼女には馬鹿にされたが、俺はかなりの甘党の上、結構量を食べる。

その為一度に一個食べた位では、俺の胃袋も舌も満足してはくれないのだ。

だからいつもケーキを買う時は、同じ種類のモノを最低でも三個は購入する。

そうしないと絶対に、後で後悔する羽目になるからだ。

「しかしアイツ、俺を脅迫するとは…。」

とはいえ別に、それが本気で不愉快な訳ではなく。

…これまで経験した事のない事態に俺は、正直ちょっとワクワクしていたりする。

彼女は二度と来るな、と言っていたけれど、美味しいケーキを人目を気にする事無く買える上、あんなに面白いものが見れるのだ。

それにあの時は動揺していた為見落としてしまったが、考えてみたら秘密を握られているのはお互い様じゃないか。

そんな事を考えながら俺は、あっという間に三個のミルフィーユを全て平らげてしまった。

だから俺はそのまま、貰ってきたチョコクッキーの袋に手を伸ばした。

そしてそれを口に含むと俺は、また思わず呟いた。

「…ヤバイ、マジで美味しい。」

岸部が焼いたと言っていたそのクッキーは、これまで食った事が無い程美味かった。

「やるじゃん、岸部！」

堪え切れずにまた、笑いが込み上げてくる。

でももう此処は自分の家だったから俺は、人目を気にすることなく声を上げて笑った。

翌日俺は教室で、彼女に声を掛けた。

「おはよう、岸部。：昨日は、ありがとう。」

アレ、すっげえ美味かったよ！」

すると彼女は大きな瞳をこれでもかという位見開き、俺を凝視した。それからにっこりと穏やかな笑みを浮かべ、岸部は言った。

「おはよう、内藤。それは、どうも。」

：でも今度余計な事言ったら、ぶっ殺す。」

そして彼女は席から立ち上がり、女子グループの輪の中に入っていた。

俺はまた笑いを堪える事が出来なくなつて、その場で一人、腹を抱えて笑った。

：こうして俺と彼女の、秘密の関係が始まった。

【5月】 始まりの、ミルフィュー 〈side RIKU〉 (後書き)

取り敢えず、5月は終了です。

次回更新は、6月の予定です。

…たぶん。

ここまでお付き合いくださった皆様、本当にありがとうございました。

【6月】 ほろ苦、テイラミス ｝side SAWA ｝

『カラン カラン！』

軽快なベルの音と共に、店のドアが開く。

そして中に入ってきたのはクールなモテ男改め、馬鹿で嫌味な甘党二重人格男、内藤だ。

あれから、約一か月の月日が流れた。

この男は飽きもせず、ちょこちょこ店にやって来ては、色んな種類のケーキを買って帰っていく。

そして母さんは、やらなくてもいいと言っているにも関わらず、サービスだと言っていつも様々なおまけをヤツに手渡すのだ。

「…また来たのね、内藤。」

私はかなりげんなりしながら、言った。

ヤツはいつもの様にニヤリと笑い、答えた。

「ああ、また来たよ？でもさあ、紗和ちゃん。

お母さんからいつも、言われてなかったっけ？

…お客様には、『いらっしやいませ。』だろ？」

…くううううっ、ムカっくっくっくっ！！！！

お気付きの方もいらっしやるかもしれないがこの男、先日から何故か私の事を、下の名で呼ぶようになった。

しかもうっとおしい事に常連と化している為、母さんと彼は私につ

いての愚痴を語り合うまでの関係になっている。

すると奥からいつもの様に、母さんが出て来て言った。

「あら！いらっしやい、内藤君。」

「あつ、こんにちは。」

あの、すみません。今日のお勧めは、なんですか？」

内藤は吐き気がするくらい甘ったるい笑顔を浮かべ、言った。

…それにしてもこの光景見るの、何回目だよ。

…ホント、勘弁して貰いたいわ。

「そうねえ…。うん、今日のお勧めは、ティラミス！

お父さん、ちょっと味をリニューアルしたとかで、かなり自信満々だったから。」

母の言葉を聞き内藤は、今にも涎を垂らしそうな程嬉しそうに笑った。

「じゃあそれを、三個下さい。」

…出たよ、三個買いつ！

その細い身体の一体何処に、同じケーキばかり三個も収まるってのよっ！？

しかし私は無言のまま、それを箱に詰め始めた。

その時また、店のドアベルが鳴った。

『カラン カラン！』

振り返るとそこには私の幼馴染、太一が笑顔で立っていた。

「いらっしやい、太一っ！」

私はとても嬉しくて、満面の笑みで言った。
すると彼は優しく微笑み、答えてくれた。

「おう、紗和。久し振り〜！」

「太一君、いらっしやい。」

でも、珍しいわね。太一君が表から家に入ってくるだなんて…。」

母さんは、不思議そうに言った。

すると太一は少し恥ずかしそうに笑い、言った。

「…今日は、ケーキを買いに来たんで。」

その時太一の背後から、私よりも更に小柄な女の子がちょこんと顔を覗かせた。

ふわふわとカールした、茶色の明るいショート・ボブ。

彼女は特別美少女という訳ではないが、花柄のワンピースがよく似合う、愛らしい雰囲気纏っている。

「あら、太一君。…もしかして、彼女？」

嬉しそうに、母さんが聞いた。

その瞬間私の心臓は、すごいスピードで脈打った。

「…ええ、まあ。」

太一はそう言うと、真っ赤な顔で幸せそうに笑った。その隣では彼の恋人も、同じ様に照れくさそうに微笑んでいる。

それから彼らはケーキをひとつずつ選び、帰っていった。当然の様に、手を繋いで…。

「あの太一君に、彼女ねえ。」

…で、紗和。アンタにはそういう人、いない訳？」

いつもは笑って流せる母さんの嫌味も、今日の私には強烈な一撃と化した。

でも私はいつもの様に、彼女の問いに答えた。

「…そんなの、いる訳ないじゃん。」

それに毎日こんなに扱き使われてて、そんな暇、何処にあるってのよ？」

すると母さんは呆れたように肩を竦め、笑った。

それから内藤にまたしてもおまけを手渡し、奥に入っていった。

「…紗和ちゃん。今の、誰？」

内藤が、静かな声で聞いた。

私は泣きそうになるのを必死に堪え、答えた。

「…私の、幼馴染。」

あんなヤツと付き合ってるだなんて、彼女、ホント変わり者だよねえ！」

笑顔でそう答えたつもりだったのだけれど、内藤はかなり慌てた様子で言った。

「ごめん、変な事聞いて…。」

でもさあ、紗和ちゃん。男なんか、他にもいくらでも居るって！」

そんな彼の様子を見て、私は思わずブツと吹き出した。

…ただの嫌味なケーキ馬鹿だと思っていたけれど、意外といいところあるじゃない。

「ハハハ、ばれちゃった？私がアイツの事、好きだって…。」

やだなあ！内藤にこんなところ、見られるだなんて。

…はい、口止め料。これも、サービスしといてあげる！」

そして私は内藤に、キャンディーを一袋差し出した。

すると内藤は真剣な表情で私を見詰め、言った。

「紗和ちゃん、無理しなくていいから。」

それに、口止め料なんかいらさない。

…こんな事、誰にも言う訳ないじゃん。」

内藤は代金をカウンターに置くと、ケーキの箱だけ受け取り無言のまま帰って行った。

「何よ、アイツ。」

折角人が、あげるって言ってるのに…。」

ホント、訳わかんないわ。…あの、二重人格男。」

私は内心激しく動揺しながらも、ひとり悪態を吐いた。

ただど私の思考はいつの間にか、失恋したばかりの太一の事よりも、内藤のあの真剣な表情に占拠されてしまっていた。

…くそっ！

何が、口止め料だよっ！

人が折角、心配してやってるっのに。

ホント、可愛気のない女だなあっ！

俺はかなり苛々しながら、店を後にした。

それにしても紗和ちゃんめ、マジでムカつく。

そんなにあの男の事が、好きなのかよ？

…俺にはあんな笑顔、見せた事無い癖に。

そこまで考えて俺は、自分の余りにも自分勝手な感情に呆れて苦笑した。

そう、何も紗和ちゃんが悪い訳じゃない。

そして彼女の前で何も知らずに恋人と幸せそうに笑っていた、あの男が悪い訳でも…。

…これは全部自分の独占欲に、他ならないのだ。

この一カ月の間に俺は、急速に彼女に惹かれていった。

迷惑がられているのは分かっていたけれど、それでも彼女との会話は楽しくて。

だから俺はあの後度々、ケーキの為だけじゃなく、『PATISSERIE KISHIBE』をひとりで訪れている。

ドアが開いた瞬間、彼女は嬉しそうに笑った。それはもう、この上なく愛らしい表情で。

俺の瞳は一瞬、そんな紗和ちゃんに釘付けになってしまったんだけれど。

…次の瞬間彼女の視線の先に気づき、凍りついた。

そこには別段これといって特徴のない、本当に平凡な俺達と同じ年くらいの男の姿。

だけど彼女はその姿を認めると、弾んだ声で言ったのだ。

「いらっしやい、太一っ！」

…なんだよ。俺とのこの、待遇の違いは。俺が呆然としていると、その男は言った。

「おう、紗和。久し振り〜！」

俺は漸く最近になって、『紗和ちゃん』と呼んでも怒られなくなっただけなのに。

…言うに事欠いて彼女の事を、『紗和』だとおっ!?

愕然としていると、彼の背後からひとりの少女がちょこんと顔を覗かせた。

その子は別段美少女という訳では無かったが、とても可愛らしい感じの女の子だった。

「あら、太一君。…もしかして、彼女？」

嬉しそうに、紗和ちゃんのお母さんが聞いた。

「…ええ、まあ。」

その男はそう言うと、真つ赤な顔で幸せそうに笑った。

その隣では彼の恋人も、同じ様に照れくさそうに微笑んでいた。

その会話を聞き俺の心は、漸く落ち着きを取り戻した。

…なぐんだ。この男、ちゃんと彼女いるんじゃない！

でもそこまで考えてから、ふと前を見た。

するとそこには、いつもの彼女からは想像もつかない程儂げな、紗和ちゃんの笑顔…。

その顔を見た途端、俺の胸はぐつと締め付けられた。

…俺、ホント最低だな。

…あの瞬間、彼女はとても辛い思いをしていたっていうのに。

それから彼らは、ケーキをひとつずつ選んだ。

…そしてその間も彼女はずっと、今にも泣き出しそうな表情で笑っ

ていた。

「あの太一君に、彼女ねえ。」

…で、紗和。アンタにはそういう人、いない訳？」

二人が帰った後、彼女のお母さんが聞いた。

「…そんなの、いる訳ないじゃん。」

それに毎日こんなに扱き使われてて、そんな暇、何処にあるってのよ？」

呆れたようにお母さんは微笑んで、それから俺にまたしてもおまけを手渡してくれた。

彼女が店の奥に入っていくと、俺はつい我慢できずに聞いてしまった。

…彼が何者であろうと、俺には全く関係ないというのに。

「…紗和ちゃん。今の、誰？」

俺の口をついて出たその声は、自分でも驚くほどに情けないものだった。

でもそれには全く気付く事無く、紗和ちゃんは泣きそうな声で答えた。

「…私の、幼馴染。」

あんなヤツと付き合ってるだなんて、彼女、ホント変わり者だよねえ！」

そう言ったその笑顔は、あまりにも悲しそうで。

…俺は瞬時のうちに、自分の無神経すぎる質問を悔いた。

「ごめん、変な事聞いて…。

でもさあ、紗和ちゃん。男なんか、他にいくらでも居るって!」

…例えば、俺とかさ。

その言葉は心の中だけに止め、ぐっと飲み込んだ。

でも俺のそんな様子を見て、彼女はプツと吹き出した。

そして俺はそんな彼女の表情に、一瞬ホツとしたんだけれど。

…次の瞬間彼女は、とてつもなく残酷な一言を放った。

「ハハハ、ばれちゃった？私がアイツの事、好きだって…。

やだなあ！内藤にこんなところ、見られるだなんて。

…はい、口止め料。これも、サービスしといてあげる!」

そして彼女は俺に、キャンディーを一袋差し出した。

…口止め料って、なんだよ。

…お前が失恋したって事を、俺がペラペラと吹聴するとても思っているのかよっ!？」

「紗和ちゃん、無理しなくていいから。

それに、口止め料なんかいらさない。

…こんな事、誰にも言う訳ないじゃん。」

俺は代金をカウンターに置くと、ケーキの箱だけ手にとって無言のまま店を出た。

あの店に通い始めて、約一カ月。

…こんなにも不愉快な気分です店を出たのは、本当に初めてだった。

俺はもやもやとした気分のまま、家の玄関のドアを開けた。そして台所に向かい、いつもの様にケーキの箱を開封する。

中には購入したばかりのティラミスと、彼女のお母さんから貰ったおまけのリーフパイ。

俺はティラミスを一つつ取り出して、手掴みでガブリとそれに齧りついた。

「…苦い。」

美味いんだけど、これは流石にちょっと苦すぎだよ…。」

俺は思わず呟いて、残りのふたつは冷蔵庫に片付けた。

【6月】 ほろ苦、テイラミス \side RIKU\ (後書き)

6月は、ちよつと重たくなってしまいました。

7月は、『戦慄の、ベイクド・チーズケーキ(仮)』です。

次月は、元のラブコメに戻る…予定です。

「…むむう。」

学校からの、帰り道。

私は一人、奇妙な呻き声を上げた。

私の掌には、悪魔からの手紙。

…ではなく、テストの答案用紙が握られている。

「…流石にこれは、親には見せれないよなあ。」

またしても独り言を呟いた瞬間、背後からにゅつと、男性にしては綺麗すぎる手が伸びて来て、その紙切れを奪った。

「…うわあ、マジかよ、紗和ちゃん。」

これは確かに、お母さん達には見せれないよなあ…。」

呆れた様に放たれた、失礼極まりない声。

…驚いて振り返ると、やはりそこには内藤の姿。

「ちよっ！？嘘でしょ、内藤っ！！」

返してよ、それっ！！返せーっ！！！！」

私は絶叫して奪い返そうとしたのだけれど、身長差があり過ぎて、悔しい事に掠りもしない。

「…で、紗和ちゃん。これ、どうすんの？」

このままじゃ夏休み、勉強三昧の地獄の日々、確定じゃない？」

クスクスと笑いながら、その答案用紙をひらひらとさせ、内藤が言う。

私は悔しい事に何も言い返す事が出来ず、無言で彼を睨みつけた。

「…内藤には、関係ないじゃん。」

漸く声を絞り出し、言った。

すると彼はふう、と小さく、溜息を吐いた。

「…可愛くないヤツだな。」

折角この学年トップの俺様が、助けてやろうかと思ってたのに。」

その言葉を聞き、私は驚いて彼の顔を見上げた。

「確か今度、追試があるんじゃないかなかったっけ？」

それまでに俺が紗和ちゃんの成績、なんとかかしてやろっか？」

嫌味な位にすらりとした長身をひょいと折り曲げて、私の顔を覗き込む内藤。

呆然としながらヤツの顔を見詰めていると、彼はクスリと可笑しそうに笑い、言った。

「どうすんの、紗和ちゃん？」

助けて欲しく、ないの？」

こう言われては、私に選択肢がある筈もなく。

…私は頭を垂れ、彼に言った。

「よろしくお願いします、内藤先生。」

…助けて下さい。」

すると内藤は驚いた様に瞳を見開き、それから満足気に笑い、言った。

「いいよ、紗和ちゃん。」

…でもやっぱり、流石にタダじゃ動く気にはなれないかなあ？」

…やっぱりね。おかしいと、思ったのよ。

あの内藤が、（嫌味を言いつつも）こんなに親切にしてくれるなんて。

「…どうすれば、いいの？」

夏休みは父さんに、ベイクド・チーズケーキを伝授してもらおう予定になってるの。

上手くいけば、お店に置いて貰えるかもしれないの。

だから絶対、勉強三昧の毎日なんか、嫌なの〜っ！！！！」

私は恥も外聞もかなぐり捨て、彼に縋りついた。

すると内藤は目を瞑り、そして何か考え込む様な表情を浮かべた後、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、言った。

「じゃあ、そのケーキが店に並ぶ前に、俺に先に食わせてよ。」

条件は、それでいいよ？」

「へっ？」

あまりにも簡単なその条件に、拍子抜けしてしまった。すると彼はまたクスクスと可笑しそうに笑い、言った。

「そんじゃ、そういう事で。」

場所は、紗和ちゃんちの近くの図書館で。

時間は、紗和ちゃんの都合のいい時でいいからさ。」

「…そんな事で、いいの？」

私が呆然としながら聞くと、彼はちょっと眉間に皺をよせ、言った。

「俺の事、どんだけ冷酷だと思ってるの？」

…気に入らないなら、もっと酷い条件に変えてあげようか？」

そしてヤツは、にいつと笑った。

その表情は、普段教室で見かける穏やかな内藤とはまるで別人で、悪魔だつて裸足で逃げ出すんじゃないかっていう位、凶悪な笑顔だった。

だから私は慌てて首を左右にぶんぶんと振り、彼に言った。

「とんでもないっ！」

内藤様、それでよろしくお願いしますっ！！！！」

すると内藤は楽しそうに笑いながら、意味不明な事を口走った。

「うちらうぞ。」

…それにその条件以上に、俺にはメリットもあるしね。」

「…は？メリットって、一体…。」

私が最後まで言い切る前に、内藤はまた意地悪な笑顔を浮かべて言った。

「数学のテストで17点を取る様な紗和ちゃんには、ちょっと理解出来ないかもね？」

そんな事より、メルアドとか教えてよ。

でないと、連絡取りあえねえじゃん？」

それからヤツは携帯を取り出し、私の目の前でちらつかせた。

だから私も慌てて自分の携帯を取り出し、通信でお互いのデータを交換した。

「よし、これでOK、と。」

内藤はまたしても満足気に笑い、それから私の頭をポンポンと撫でた。

「じゃあ、紗和ちゃんが家の手伝いがない日に、教えてやるから。

まあ俺もバイトがあるから、いつでもOKって訳にはいかないけどね。」

見上げると内藤は、これ以上は無いつてくらい、優しい表情で微笑んでいて。

私の心臓はその瞬間、壊れちゃったんじゃないかっていう程高鳴った。

嘘でしょっ!？

内藤相手に、なにドキドキとかしてんのよっ!？

いくらちよっと優しくされたからって、有り得ないってのっ!!!

私は内心の動揺を必死に隠しながら、びしっと人差し指をヤツの鼻

先に突きつけ、いつもの様に悪態を吐いた。

「子供扱い、しないでよっ!!」
それと交換条件付きなんだし、私はあんたの下僕になった訳じゃないから。

そこんどこ、勘違いしないでよねっ!!」

すると内藤は呆れた様に、はぁ、と溜息をまたひとつ吐き、小さな声で言った。

「…ホント、可愛くないヤツ。

…なんで俺、こんな女の事、…なんだろう?」

ヤツの言った言葉がちゃんと聞き取れなかったから、私は言った。

「…何よ、内藤。

嫌味なら、もっととはつきり、聞こえる様に言いなさいよっ!

それにそんなに何回も可愛くないって言われなくても、そんな事、自分でも嫌ってくらい分かってるわよっ!」

するとヤツは、一瞬だけかなりげんなりした表情を浮かべたのだけれど、それからまたクスリと笑い、言った。

「…もう、いいよ。

じゃあね、紗和ちゃん。ケーキが食べられる様、期待してるよ」

【7月】 戦慄の、ベイクト・チーズケーキ side SAWA (後書き)

最初、『戦慄』が『旋律』になってました。

∴アホだ、アホすぎる。

「ホント、可愛くないヤツ。」

…なんで俺、こんな女の事、好きなんだろう?」

あまりにも酷い彼女の言葉に、思わず本音が零れた。

しかし幸か不幸か、紗和ちゃんはその声が聞き取れなかったらしく、更なる悪態を吐いた。

「…何よ、内藤。」

嫌味なら、もっとはつきり、聞こえる様に言いなさいよ!

それにそんなに何回も可愛くないって言われなくても、そんな事、自分でも嫌ってくらい分かってるわよっ!」

…ホント、冗談じゃない。

…人の善意を、一体何だと思ってるんだ?

なんて言いながらも、ちゃっかり下心ありの善意だから、あまり偉そうなことは言えないけどさ。

内心かなりげんなりしながらも、俺は気を取り直し、笑顔で言った。

「…もう、いいよ。」

じゃあね、紗和ちゃん。ケーキ食べれる様、期待してるよ。」

そしてその週の、水曜日の朝。

お店が休みだから、放課後勉強を教えて欲しいと、紗和ちゃんからメールが届いた。

彼女のメルアドを手に入れてから、正直何度自分から連絡しようと思っただけのことか。

だけどそんな事したら、変に彼女に警戒されても嫌だし、あくまでも紗和ちゃんからの依頼に付き合っているんだ、という形をとってたかった。

『了解。じゃあ4時に、図書館で待ち合わせな!』

内心みつともないくらいウキウキしながらも、用件だけをメールで送った。

しかしその直後、彼女から予想外の返信が届いた。

『ありがとう。』

付き合わせちゃって、ごめんなさい。』

「…なんだよ。メールだったら、可愛い事も言えるんじゃない。」

携帯の画面を見つめながら、思わず笑みが溢れ出る。

そして俺は上機嫌のまま、学校へと向かった。

放課後、図書館に着くと、既に紗和ちゃんは到着していた。

シンプルなダークグリーンのTシャツにジーンズという、あまりにも男らしい彼女の姿。

初めて見る私服姿にほんの少しだけ期待していた俺は、その姿にかなりがっかりしてしまった。

「何よ、内藤？」

「なんで来るなり、そんなにげんなりした顔してんのよ？」

彼女は心底不機嫌な様子で、俺の事を睨みつけた。

「…いや、なんでもない。」

「俺が、バカだったただけだから。」

「…考えてみたら、全然想定外の範囲内の事だしね。」

すると紗和ちゃんは不思議そうに首を傾げ、上目遣いで俺の事を見上げた。

「…どうしたの、内藤？」

「本当に私、なんか変な事、した？」

「…ヤバい、可愛すぎる。」

これも惚れた、弱みというヤツだろうか？

こんな格好でもやはり、彼女はどうしようもないくらい可愛いのだ。抱きしめたい衝動を必死に抑えながら、俺は冷静を装い、答えた。

「…いや。」

初めてのデートだって言うのに、あまりにも紗和ちゃんが、ボーイッシュな格好してるから。

「流石にちょっと、がっかりしちゃったよ。」

本音をたっぷり込めて、冗談めかして言う。

すると彼女は瞳を見開き、真っ赤な顔で大声で叫んだ。

「…な、な、何言ってるのよっ!？」

私は勉強を教えて貰いに来ただけで、あんたとデートだなんて、冗談じゃないわよっ!?!?!?!」

あまりにも予想通りの彼女の反応が可笑しくて、俺はクスクスと笑いながら答えた。

「あれ?デートじゃ、なかったの？」

俺は、そのつもりだったんだけどねえ。」

すると彼女は心底嫌そうに口をへの字に曲げ、言った。

「…もう、どっちでもいいわよ。」

…なんかこの話するの、面倒くさくなってきた。」

あまりにも冷たい、紗和ちゃん言葉。

でも言われた内容は、俺にしてみれば悪く無い気もする。

だって不満気ではあるものの、これをデートだと、認めてもよいと言ってくれたんだから。

「じゃあ、行こっか?」

俺は彼女に声を掛け、二人で図書館の自動ドアを通り抜けた。

「…じゃあ、ここまででは分かるよね？」

で、ここでこの数式を、当て嵌めて…。」

教えてみて分かったのだけれど、彼女は俺の想像以上に強敵だった。

これまでの授業で、何を教わってきたんだ？と聞きたくなるくらい、紗和ちゃんは内容を全く理解していなかったのだ。

しかし逆に、何も理解していないため、面白い様に俺の教えた事を吸収していく。

だから俺も、彼女との距離を少しでも縮めたいというよ邪な考えを忘れ、つい真剣になってしまった。

…この、真面目過ぎる性格が憎い。

閉館の時間を知らせるアナウンスが流れる頃には、彼女は最初とは比べ物にならない程、問題を解ける様になっていた。

「ありがとう、内藤！」

数学って、結構面白いんだねえ！」

紗和ちゃんは、めちやくちや愛らしく微笑み、言った。

俺は一瞬、その仕草に目を奪われ、言葉を失った。

だけど慌てて平静を装い、彼女に言った。

「うん、そうだね。」

それに紗和ちゃんは教え甲斐があるから、こっちも楽しかったよ。

率直な感想を述べると、彼女は何故か、戸惑った様な表情を浮かべた。

でもそれからまた、すぐにいつもの勝気な顔に戻り、言った。

「それってもしかして、私が馬鹿だから、って事？」

「…違うよ。なんでもどんどん吸収するスポンジみたいで、って意味だよ。」

紗和ちゃん、今まで苦手意識から逃げてただけで、別に数学自体、不得意な訳じゃないんだよ。」

…ホント、なんでこんなに素直じゃないんだろう？
でもそれすらも可愛いなんて思ってしまう俺は、きつとかなりの重症だ。

「…そうかな？」

でも、先生に教えて貰うより、内藤に教えて貰う方が分かりやすかったし、楽しかったよ。

本当に、ありがとう！」

それから彼女は、少し恥ずかしそうに俺を見上げ、言った。

「…また今度も、付き合っただけでもいい？」

試験、来週の金曜日なんだけど、まだ不安で…。」

願ってもない、彼女からの申し出。

本当は水曜はバイトが入っているけど、前もって言うておけば、たぶん大丈夫だろう。

「いいよ。じゃあまた、お店が定休日の、水曜にね！」

そしてその後も結局、彼女の追試までの間、三回程図書館に付き合っただけ。

こうして紗和ちゃんは、無事『勉強三昧の、地獄の夏休み』から逃れる事が出来たのだった。

『ピンポーン!!!』

夏休みに入り、最初の水曜日。

家の、チャイムが鳴った。

ダラダラと自宅で過ごしていた俺は、ゆっくりと立ち上がり、玄関へと向かった。

ドアを開けるとそこには、満面の笑顔を浮かべた、紗和ちゃんの姿。俺は訳が分からずに、ただ呆然と彼女の事を見詰めた。

「ありがとう、内藤っ!!!」

ベイクド・チーズケーキ、お店に置いて貰える事になったのっ!

!!!」

彼女は嬉しそうに笑い、俺にぎゅっと抱き付いた。

俺は突然の事に驚き、身動きが取れなくなってしまったのだけれど、彼女はそんな事には気付きもせず、幸せそうに笑っている。

この行動には、全く深い意味なんてなく、俺と彼女の感情の温度差を、まざまざと見せつけられた。

それでもやっぱり嬉しいって思ってしまう自分が、忌々しい。

それから彼女は俺から身体を離し、『PATISSERIE K I

SHIBE』の紙箱を手渡した。

「はい、これ。」

約束の、ベイクド・チーズケーキです!」

にっこりと微笑み、彼女は言った。

そこで俺は漸く我に返り、笑顔で箱を開けた。

中には綺麗に並べられた、シンプルなチーズ・ケーキが三個。

「ありがとう。わぁ、すっげえ美味そうじゃん」

すると彼女は腰に手を当て、得意気に言った。

「ちゃんと父さんにも認められた、自信作ですから！」

ああ、もう。

なんで今日のコイツ、こんなに可愛い訳？

お父さんに認められて、嬉しいっていうのもあるんだろうけれど、あまりにも素直でニコニコの笑顔の彼女のこの可愛らしさは、はっきり言って凶悪だ。

「そつか。じゃあ、楽しみにしておくよ。」

俺も笑顔でそう答えたのだけれど、その瞬間、何故か彼女はピキリと固まり、動かなくなってしまった。

「…紗和ちゃん？」

訝しく思い、彼女に声を掛けた。

すると紗和ちゃんは、ハツとした表情で俺を見上げ、言った。

「じゃあ、そういう事だっ！」

ホント、ありがとうございましたっ！」

それから彼女はぺこりと礼をして、慌てた様子で帰って行った。もうちょっとゆっくり話をしたかったけれど、まあ仕方がない。

家に入ると俺は、早速台所に向かい、ケーキをひとつ、手掴みで取り出した。
その瞬間俺の鼻を撫^{くすぐ}る、甘い香り。
ガブリと齧りつくくと、口の中一杯に、濃厚なチーズの味と、程良い甘さが広がる。
口の中で蕩けるしっとりとしたケーキの部分と、底に敷かれたビスケット生地バランスも絶妙だ。

「…うまつ！」

さすが紗和ちゃん、このケーキ、マジで美味しいよ。」

俺はうつとりとしながら、ケーキを頬張る。

あっという間に二個のケーキを平らげたのだけれど、なんだか全部一度に食ってしまうのは勿体ない様な気がして、残りのひとつは冷蔵庫へ片付けた。

あまりにも女々しい自分自身に、幾分呆れながら。

『恋愛は、惚れた方が負け』ってという言葉。

これがもし勝敗を決める必要があるゲームなら、俺は間違いなく負け確定だ。

でもこれはゲームじゃないし、まだ終わった訳でもない。

覚悟しててね、紗和ちゃん。

そのうちきつと、君の事を捕まえてみせるから。

【7月】 戦慄の、ベイクト・チーズケーキ side RIKU (後書き)

7月分の更新、終了です。

8月のスイーツは、『パンナコッタ』の予定です。

(我ながら、どうでもいい情報だ…)。

【8月】 涙の、ドーナッツ？ ｝side SAWA ｝

「…おかしいわね。」

わたしは思わず、ポツリと呟いた。

一体何がおかしいのかというと、実は先日から内藤を見る度、奇妙な動悸と息切れに襲われるのだ。

「なんだよ、紗和ちゃん。」

…人の顔を見ておかしいとは、失礼極まりないなあ。」

心底げんなりした様子で眉間に皺を寄せ、店のカウンター越しに内藤が言った。

「最近、変なのよ。」

内藤を見たら、なんだか体調が悪くなる…。」

「はあっ!？」

ただの夏バテを、俺の所為にしてんじゃねえよっ!

全く、お客様をなんだと思ってるんだ?」

内藤はきれいな口元をへの字に歪め、わたしの事を睨みつけた。

…そりゃそうか。

考えるまでもなく、言ってる内容、めちゃくちゃ失礼だもんな。

「そっか。そうよね。」

内藤を見るだけで体調が悪くなるだなんて、気の所為かも。

最近暑い日が続いてるから、きつとその所為ね!」

「そうだよ。ホント、失礼なヤツ！
こうして無事に夏休みを迎えられたの、一体誰のお陰か覚えてる？」

そう言うと内藤は、今度はつんと唇を尖らせた。

あまりにも子供染みだその表情が可笑しくて、思わず吹き出してしまったんだけど、慌てて言った。

「ありがとう、内藤。

ホント、感謝してる！」

するとヤツは満足気にニツと笑い、それから告げた。

「ねえ、紗和ちゃん！明後日の日曜、暇？

もし予定がなかったら…。」

その瞬間わたしの心臓は、またしてもどくと跳ね上がった。

今日の日曜か…。

その日は確か、美月の買い物に付き合う予定になってたはず。内藤が最後まで言い切るより早く、わたしは答えた。

「ごめん、内藤っ！その日はダメだわ。

もう予定、入れちゃった！」

すると内藤は一瞬困ったような顔をして、でもそれからまたいつもの様に意地悪な笑顔を浮かべ、言った。

「…そつか。じゃあ、しかたないな。

紗和ちゃんの大好きな浦和レッズの試合のチケット、貰ったんだ

けど。」

「うそっ！？もっと早くに言ってくれたらいいのにつ！」

セールが始まるから、美月、その日じゃないと絶対ダメって言うてたし…。」

すると内藤は目の前でチケットをひらひらさせながら、またしてもニヤリと笑い、言った。

「…それって、俺の所為な訳？」

ホント、紗和ちゃん自分勝手なんだから。

でもさあ、友情は大事にしないとね？

じゃ、そういう事で！」

それからヤツはケーキの箱を手に、嫌味なくらい爽やかに微笑み、去って行った。

ホント、底意地の悪い男っ！

この間の事は感謝してるけど、やっぱりアイツ、最悪だわっ！

それにしても、本当に残念だ。

大好きなサッカーの試合、タダで見れるチャンスだったのにつ！

わたしはヤツの忌々しい笑顔を想い浮かべ、大きな大きな溜息を吐いた。

【8月】 涙の、ドーナッツ？ ～side SAWA～（後書き）

いまさらですが、8月分更新開始です！

4回の更新終わらせて、引き続き9月分を更新…予定。

…全然続き、書いてないけど。

【8月】 涙の、ドーナッツ？ ～side SAW～

そして、日曜日。

わたしは美月の買い物に付き合った後、二人で駅前のドーナッツ屋さんで、いつもの様に他愛もない話をしながらカフェオレを飲んでいた。

いつもは忙しくて、なかなか彼女に付き合う事は出来ないけれど、やはり美月と話すのは楽しい。

だから、ついつい長居をしまっていたのだけれど…。
ふと、窓の外を見た瞬間。

…わたしの思考は、完全に停止してしまった。

視界に映ったのは、内藤の姿。

しかし、ヤツはひとりではなく。

…女の子と、腕を組んで楽しそうに笑っていた。

クラスで見せるのとは違う、わたしに向けるのと同じ意地悪な表情で。

その子は女の子にしては背が高く、スラリとしていた。

サラサラで艶やかな茶色の髪は、腰まである。

肌は、まるで陶器の様に真っ白で滑らかで。

ちよつと高めの鼻、赤みを帯びた形の良い唇。

茶色の大きな瞳は、綺麗に長い睫毛で縁どられている。

神さまが特別に作った、上等なお人形みたいな女の子

…わたしとはまるで、正反対の。

「あ…。」

思わず小さな声を上げると、美月もわたしの視線の先に気付いた。

「あれ…？あれ、内藤君？」

うわぁ…やっぱり、彼女いたんだぁ！

すっごい美少女…。

…って、紗和ちゃんっ！？どうしたの、ちよっつっ！！」

「…え？」

わたしは訳が分からないまま、彼女の問いに答えようとしたんだけど…。

そこでわたしは、漸く気付いた。

自分の頬を伝っていく、たくさんの涙に。

嗚咽を堪えることが出来ず泣き続けるわたしの頭を撫でながら、美月が言った。

「…そっかぁ。」

紗和ちゃんは、内藤君の事が好きなんだね…。」

その言葉を聞き、わたしは驚いて彼女の顔を見上げた。

すると今度は美月がびっくりした様に瞳を見開き、それから呆れたように言った。

「…まさか、無自覚？」

…ホント紗和ちゃんったら、鈍感なんだから。」

それを聞いた瞬間、全ての答えが分かった気がした。

あの、不可解な動悸も。

…迷惑だといいながらも、彼がお店に来るのを楽しみにしていた理

由も。

「美月いっつ！どうしよう…？」

気づいた瞬間失恋なんて、悲しすぎるよ…。」

尚も泣きながらそう言ったわたしに、美月は優しく微笑み、言った。

「…うーん、そうだね。

でもね、紗和ちゃん。

全ての恋愛が、うまくいく訳じゃないわ。

こんなに泣ける程好きになれる相手なんて、そうそついないわよ？
だからそういう相手と出逢えただけで、紗和ちゃんはラッキーなのよ？」

いつもはわたしよりも子供っぽくて、甘えん坊の美月。
なのにこの時の彼女は、どこかとても大人びていて…。

「…ねえ、美月。

…美月もつらい恋愛、した事あるの？」

わたしが聞くと、彼女は困った様に笑い、言った。

「…あるよ？」

…っというか、いまも現在進行形で、してる。

だけどね、紗和ちゃん。

…わたしは自分の気持ち、大切にしたいって思う。

…叶わない想いだからって、なかった事にしちゃうの、かわいそうじゃない？」

わたしが尚も泣きながら彼女を見つめていると、美月は言った。

「…もう、いつもと立場が逆ね？」

ほら、紗和ちゃんっ！もう、泣きやんで？

カフェオレの氷、溶けてきちゃったじゃないの！」

そして美月は、笑った。

わたしも、彼女の笑顔を見て、笑った。

気づいた瞬間、失恋の確定している恋。

…だけどわたしは、折角生まれてきたこの気持ちを大切にしたいと、この時心から思ったんだ。

【8月】 涙の、ドーナッツ？ \ side SAWA \ (後書き)

8月分を、今更新…。

今回は紗和視点のみ、9月は陸視点&紗和視点で進めたいと思います。

【9月】 誘惑の、シュークリーム ｝side RIKU ｝

紗和ちゃんに断られたから、余ったチケットがもつたいなくて、俺は渋々ある人物を誘った。

その人物とは、俺の親戚、遠野 空。

母の姉の娘である彼女は、俺よりひとつ年下の、高校1年生。

見た目はかなりの美少女だが、性格はかなりの男前で、三度の飯よりもサツカーを愛している。

しかし、そのギャップで白い目で見られるのを嫌い、いつもはお上品な美少女を装っているのだが…。

「うそっ！？ホントに、わたしが一緒に行っているのっ!？」

「…ああ。他に行くヤツ、いないからな。」

幾分忌々しく思いながら、俺は答えた。

しかし受話器の向こう側の相手は、そんな気配に気づく事なく、興奮した調子で言った。

「うわぁ…、寂しいヤツ…。」

でも、ラッキーっ！陸、愛してるっ?」

心底げんなりしながら、彼女の言葉に答える。

「…悪かったな、寂しいヤツで。」

「…まあ、とにかく日曜、空けとけよ?」

「もちろんっ!だって、レッズの試合だよっ!？」

空けとくに、決まってんじゃんっ！！」

電話を切った後、俺は溜息を吐いた。

「はあ…。何が悲しくて、アイツとデートしなきゃなんないんだか…。」

俺はもう一度大きな溜息を吐き、それからソファアールにごろんと寝転がった。

そして、日曜日。

待ち合わせの駅に現れた空は、浦和レッズの真っ赤なTシャツに身を包み、完璧なサポーターモード。

「やる気、満々だな。」

幾分呆れながらさういって、空はニッと笑った。

「当然じゃんっ！もう、興奮しすぎて、今日は5時に目がさめちゃったよ。」

鼻息荒くさう言う姿は、まるで小学生のガキみたいだ。それでもやはり空の整った見た目は目立つらしく、かなり人目を引いた。

「じゃ、とりあえず、行くか。」

俺が言うと、空も嬉しそうに笑い、答えた。

「うん 喜んで、お供させて頂きまーす！」

それから空は、満面の笑みを浮かべ、俺の腕に纏わりついた。

「うわっ、離れるよ、空っ！」

まじで、うざいつー！！」

その言葉を聞いた彼女は、クスリと笑い、それから言った。

「うざいつて、失礼だなあ。」

でも、そう言われると離れるの、イヤになる」

「…この、天の邪鬼め。」

俺は、可愛い妹みたいな彼女の態度に苦笑して、それから歩き始めた。

空は、尚もクスクスと笑いながら、俺の腕を離そうとはしない。

でも俺は、気付いていなかったんだ。

…この最悪のシチュエーションを、紗和ちゃんに見られてただなん

『カラン カラン！』

月曜日。

いつもの様に軽快なベルの音と共に、店のドアが開いた。そしてそこから顔を覗かせたのは、悔しい事にわたしが片想い中の甘党バカ男、内藤だ。

「…いらっしやいませ。」

内心、まだ顔を合わせたくはなかったけれど、それだけ告げた。すると内藤は少しだけ眉間に皺を寄せ、それから言った。

「…うん。」

「…なんか今日は普通の客扱いで、気持ち悪いな。」

「…普通のお客さま扱いの、何が気に入らないの？」

「…変なヤツ。」

口について出るのは、片想いを自覚してもやはり、かわいくない悪態。

わたしは少し泣きそうになりながら、ヤツから視線を逸らした。

「昨日は、どうだった？」

偶然見ちゃったんだけど、すごい可愛い彼女と一緒にだったじゃん！

あんな子いるなら、わたしなんか誘わないで、最初からあの子誘

えばよかったのに……。」

ショーケースを拭きながら、わたしは聞いた。

「……は？」

「……あんなに可愛い子、って。」

「……なんだ、見られちゃったんだ？」

それから内藤は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、続けた。

「……気になる？」

くうううっ！！なんでこんなバカ男に、わたしは片想いなんかしてんだろう？

なんか、腹が立ってきたあぁっ！！！！

だからわたしは満面の笑みを浮かべ、答えた。

「ううん、まるで？」

ただ、あんなに可愛い純粹そうな子、内藤の毒牙にかかってかわいそうに、と思ってるね？」

するとヤツはさっきよりも深く眉間に皺を刻み、それから見た事もない程真剣な表情で聞いた。

「……ホントに、それだけ？」

真っ直ぐに瞳を見つめられ、体温が急上昇するのを感じた。心臓は、どうしようもない程激しく脈打っている。

「…っ！！！」

何も言えないでいるわたしを、吃驚したように見つめた後、何故か内藤は嬉しそうに笑った。

「…もしかして、嫉妬？」

またしても嫌味な笑みを浮かべ、内藤は問う。
わたしは激しく動揺しながらも、更なる悪態をついた。

「そんな訳、ないでしょっ!？」

「あんたホント、ばっかじゃないのっ!？」

するとヤツは、先程までの意地悪な笑顔とは違つ、優しい表情で言った。

「アイツは、ただの従妹。」

「…ホント、そういうんじゃないから。」

「…そう、なんだ。」

思わず、ポツリと呟いた。

すると内藤はまた嬉しそうに笑い、言った。

「だから、心配しなくていいからね？」

「…なっ！！！！????」

その言葉を聞き、また全身の血液が逆流してしまったかのように熱くなるのを感じた。

それを見て、ヤツは可笑しそうにクスクスと笑っている。

「…ホント、訳分かんないわっ！」

ケーキ買わないなら、とつとと帰ってよねっ！」

本当はすごく嬉しい癖に…。

「今日は、実は客じゃないんだよねえ…。」

そう言うと内藤は、ニイっといたずらっ子みたいに笑った。

「…はあ？」

ヤツの意図が分からずに、思わず問い返す。

すると内藤は、カウンターに小さな可愛い紙袋を置いた。

「はい！これ、やるよ！」

姉ちゃん手作りの、シュークリーム

まじでうまいから、食ってみ？」

そしてわたしが啞然としてる間に、ヤツはくるりと踵を返して帰っていった。

閉店後、シュークリームを手取る。

さっくりと焼き上がったシュー生地を割ると、中からとろりと生クリームとカスタードが溢れ出た。

「…見た目は、おいしそうだけど。」

…ケーキ屋に洋菓子だなんて、喧嘩売ってんのかしら？」

ひとくち、ガブリと齧りつく。

「何、これっ!？」

… ホントに素人の、手造りなのっ!？」

するとそれは、食べたことがないくらい 優しい味で…。
驚いて、思わず声を上げた。

… どうでしょう??

このレシピ、教えて欲しい…。

わたしは迷いながらも、携帯を手にした。

あの追試以来、初めてヤツにメールするために…。

【9月】 誘惑の、シユークリーム ｝side SAWA ｝ (後書き)

夜の、7時過ぎ。
携帯が、軽快なリズムを刻む。

「内藤、お願い！」

お姉さんに、あのシュークリームのレシピ、聞いてもらえないかな？」

内容を確認すると、思わず笑みが零れた。

もしかしたら、なんて思っただけのもの、予想通りの紗和ちゃんからのメール。

姉ちゃんの作るシュークリームは、絶品だ。

これまで幾多のケーキ屋を渡り歩いた俺が言うんだから、間違いない。

そして、あれを食べたら、紗和ちゃんがそのレシピを知りたがるに違いないという事も、想定の内だった。

我ながら姑息な手だとは思いが、もう形振りなど構ってはいられない。

しかも今日のあの様子からして、俺、ちょっとは男として意識されてるみたいだし…。

相手があの激ニブ紗和ちゃんだから、多くは期待してはいけない。

そう思いつつも、あの時の、紗和ちゃんの真っ赤な顔…。

あれが店の中じゃなかったら、俺、マジでヤバかったかも…。

なんて考えてる事は、当然彼女には知られる訳には行かないけどさ。そして俺は、あらかじめ考えていたメッセージを送信した。

『仕方ないなあ…』

じゃあ、聞いといてやるよ

交換条件は、ハロウィンのケーキを、俺の為だけに作ること！』

紗和ちゃんの作るケーキは、もちろん魅力的だ。

だけど、今回の最重要ポイントは、そこではない。

『俺の為だけに』というところだ。

きつと鈍感な彼女は、俺の意図になど気づきもしないだろうけれど…。

でも、そのケーキを作ってくれている間だけは、俺の事を思ってくれるんじゃないだろうか、などと考えている、女々しい自分。

情けなくても、どんな手を使ったとしても、自分と対等とまではいなくても、せめて10分の1くらいは自分の事を考えて欲しい。

そして、翌日。

学校で、姉ちゃんに書いてもらったレシピを彼女に手渡した。

すると彼女は、これ以上は無いという程嬉しそうに笑って、言った。

「ありがとう、内藤！」

早速今日、作ってみるね」

あまりにも愛らしいその表情と、嬉しすぎる言葉。

ホントにケーキが絡んだ時の彼女は、素直でかわいい。

思わず笑みが零れた瞬間、彼女がまたしてもピキリと固まってしまった。

「…紗和ちゃん？」

幾分訝しく思い、声を掛けた。

すると彼女はぶんぶんとして左右に首を振り、それから慌てた様子で言った。

「あ、あ、あのね、内藤っ！」

ハロウインのケーキって、何がいいかな？

パンプキン・パイか、パンプキン・プディング どちらがいい？

昨日から迷ってたんだけど、内藤、どっちが好きか分かんなくて

…。」

それから彼女は、困った様にちらりと上目遣いに俺を見上げた。

…か、か、か、かわいいつ…！！

思わず抱きしめそうになる両腕を必死で抑え込み、なるべく平静を装って答える。

「…じゃあ、パンプキン・パイで。」

…ちゃんと、手を抜かずにつくってくれよな？」

すると紗和ちゃんは、先程までの愛らしい仕草から一転、いつもの挑発的な表情へと変わった。

「あつたり前でしょ？」

例えあなたの為でも、お菓子作りの手を抜くはずないじゃん！」

その言葉を聞き、思わずため息が零れた。

ただどすぐに気を取り直し、笑顔で告げた。

「…そうだね。」

…その言葉、忘れんなよ?」

そして彼女のおでこを、中指で軽く弾いた。

すると紗和ちゃんは、ムツとしたように、唇を尖らせた。

「でもホント、楽しみにしてるから。」

…紗和ちゃんが、俺の為だけに作ってくれるの。」

わざとそこを強調し、もう一度彼女に言う。

紗和ちゃんは、戸惑った様に俺を見詰めていたけれど、俺はそのまま教室を後にした。

【10月】 ハロウィンには、パンプキンパイ ｝side SAWA ｝

「はあ…。アイツ、なんであんな事、言ったんだろう?」

ハロウィン当日、わたしは内藤からリクエストのあったパンプキン・パイを焼きながら、ひとり呟いた。

『でもホント、楽しみにしてるから。』

…紗和ちゃんが、俺の為だけに作ってくれるの。』

あの日以来内藤の声が、脳内で何度も何度も自動再生される。特に深い意味なんてなく、からかわれただけに決まっているというのに…。

頬が、勝手に火照るのを感じる。

…子供のころからずっと片想いしていた太一の事を考えている時でさえ、こんなになる事はなかったというのに。

『プンプンプンプンッ!…!』

セットしていた焼き上がり時刻を知らせる、タイマーが鳴った。扉をあけると中からは、ふわりと漂う甘いいかぼちゃの香り…。

「この、いたずらっ子みたいな悪そうな顔。

…ちよっと、内藤に似てるかも。」

思わず、クスリと笑みが零れた。

「うん、完璧っ

…気にいってくれると、いいなあ。」

お店のレシピとは少し変えて、内藤好みに少しだけ甘く仕上げたパンプリン・パイ。

オーブンからこんがりと焼けたパイを取り出し、型から抜き取る。見た目にもこだわって、ちゃんとハロウインのかぼちゃお化けの模様も入れてあるそれは、我ながら会心の出来栄えだ！

交換条件として出された内藤からのお願いだというのに、いつの間にかヤツを喜ばせることだけを考えていた。

いつもみたいに、ケーキを前にして、嬉しそうに笑う内藤の姿を想像すると、心が躍った。

少し置いて冷めたそれを、ハロウインの愛らしいお化け達が飛び交う箱に納める。

本当ならうちの店の箱を使ってもよかったのかもしれないが、なんだかそうはしたくなかった。

そして、簡単なラッピングを済ませると、わたしは出掛ける支度を始めた。

そんなに気合を入れる必要もなかったとは思うのだが、つい張り切って珍しくワンピースなんてものを着てしまった。

あまりスカートの似合わないわたしたが、このダークグリーンシンプルなデザインは、お気に入りだ。

以前きた時はほとんど緊張なんてしなかったのに、今日は胸のドキを抑えることが出来ない。
内藤にわたしの感情を知られたら、きつといままでみたいな関係は保てなくなるといふのに…。

わたしは深呼吸をひとつして、ケーキの入った紙袋を手に、内藤の家の玄関のチャイムを押しした。

『ピンポーン！！』

チャイムの音が、響く。

自分で押したというのに、その音にびくりと反応してしまう。

「はいー！」

中から、愛らしい女性の声が聞こえ、ゆっくりとドアが開いた。
出てきたのは、その声のイメージ通りの、愛らしい人だった。
わたしよりも年上だとは思うが、可愛いという表現がぴったりな。

ふわふわとカールした、艶やかな茶色の髪。

大きくはないけれど、キラキラと輝く瞳。

柔らかそうな、マシユマロみみたいな肌。

「あ…あの、陸君いますか？」

動揺しながらも、彼の名前を伝える。

内藤ではなく。陸君…。

自分で口にしたというのに、その声にまた激しく動揺した。

「おっ！紗和ちゃん！」

「約束の物、届けに来てくれたんだ？」

女性の後ろから、ひょっこりと内藤が現れた。

「…うん。」

「…約束だからね。」

もっと可愛らしい事を言えたらいいのに、こんな言葉しか出て来ない。

そんな自分にうんざりしていたら、女性がワクワクした表情で頬を上気させ、興奮した様子で言った。

「あら、すごく可愛らしい子ね？」

「…もしかして陸の、彼女？」

「ちっ、違いますっ！！！」

慌ててわたしが否定すると、内藤はげんなりした顔で大きな溜息を吐いた。

「…姉ちゃん。」

「…もういいから、中入ってるよ。」

うわあ…。内藤の不機嫌モード、MAXだあ…。

わたしの事を彼女と間違えられたのが、そんなにイヤだったのかなあ…。

「あつ、あの、大丈夫ですつ！
わたしもう、失礼しますから…。」

わたしはちよつと泣きそうになつてしまったのだけれど、内藤のそんな雰囲気気付かないのか、お姉さんはぶうつと頬をふくらませ、言った。

「ダメよお！せつかく、来てくれたのに！
ね、上がつて、お茶だけでも飲んで行つて？」

そんな風に言われたら、断るすべもなく…。
…わたしは死刑の執行台に向かう囚人の様な気分で、歩を進めた。

「ごめんな！姉ちゃん、強引で…。
コイツ、ほんと無神経だから…。」

困つた様に内藤は言ったのだけれど、首を横に振り、言った。

「ううん。優しそうな、素敵なお姉さんだね！
わたし、兄弟いないから、ホントうらやましいよっ！」

わたしがそう言つと、お姉さんはふにやりと嬉しそうに笑つた。

「ホント、紗和ちゃんつて かわいいわあ
陸みたいな意地悪な弟じゃなく、こんなかわいい妹が欲しかった
わ…。」

それを見た内藤は、心底不機嫌そうに言った。

「…姉ちゃん。用がないなら、向こう行けよっ！」

だけれど彼女は何処吹く風で、飄々と答える。

「いやよっ！だって陸を女の子が訪ねてくるだなんて、初めてだもの

の
あ…、そうだ、何かお菓子を用意するわね？」

そこでわたしは、漸く本来の目的を思い出した。

「あつ、これ…。

頼まれてた、パンプキン・パイ！

この間の、レシピのお礼ね？

お姉さん、本当にありがとうございました！」

内藤に手渡すと、ヤツはいつものように、とっても嬉しそうに子供みたいな顔で笑った。

またしてもその表情に、動揺を隠すことが出来なくなるわたし…。

「ありがとな、紗和ちゃんっ！

わあ…すっげえうまそうっ！」

箱を開け、満足気に笑う内藤から、お姉さんはさつとそのパイを奪い取った。

「…頼まれた、って。

…まさか陸、お礼を紗和ちゃんに要求してたのっ!？」

さつきまでの穏やかな表情からは一転、お姉さんは鋭い視線を内藤に投げかけた。

「あっ…っ、大丈夫ですっ！
わたし、ケーキ作るの、ホントに大好きだし…。」

慌ててそう言ったわたしを、お姉さんはいこつと満面の笑みを浮かべ、抱きしめた。

「っ…!!!…!!!…」

呆然とした表情で、わたし達を見つめる内藤。

なんだか照れくさくて、わたしが彼女の腕から逃れようとする前に、内藤がさつとわたしの腕を掴み、自分の方へと引き寄せた。

「…勝手に紗和ちゃんに、触んじゃねえよっ！」

初めて至近距離で見ると、ヤツの顔。
掴まれた腕が、急速に熱を帯びていく。

「…つまんないのお！」

せつかく可愛いお客さんが 来てくれたのに…。」

お姉さんはそう言うと、また頬を膨らませた。

それからお姉さんは、とつても嬉しそうに笑い、言った。

「…どうせなら、紗和ちゃんが陸のお嫁さんに来てくれたらいいの
に！」

そうしたら彼女、わたしの妹になるのになあ…。

あっ…、でも、ダメねえ…。陸、いじわるなもの！」

そして彼女は、残念そうに溜息を吐いた。

「あつ…あのっ!?!」

お姉さんの言葉の意味を理解し、激しく動揺する私。
それを見て、彼女はくすくすと楽しそうに笑った。

きつとまた内藤、不機嫌になってるわっ!!
そう思い、見上げると…。

内藤は、吃驚するくらい真っ赤な顔をして…。

「まじで向こう、行ってくれよ…。

…姉ちゃん、頼むから。」

内藤が、ポツリと呟いた。

それを聞いたお姉さんは、尚もクスクスと笑いながら、リビングを後にした。

「…紗和ちゃん、ありがとな。

すっげえ、美味そうっ!」

いつになく謙虚な、内藤の言葉。

その言葉に反応し、わたしの心が躍る。

「うん!

内藤の為に、普通のレシピより、ちょっと甘めに作ってるから。
かなりの、自信作だよ?」

すると内藤は、一瞬驚いた様に瞳を見開き、それからニッと嬉しそうに笑った。

そんな彼の表情を見て、わたしも嬉しくて笑った。

【10月】 ハロウィンには、パンプキンパイ ｝side SAWA ｝（後書

漸く、10月分まで終了です（^^;）

今月中には、11月分の更新を終えたいなあ…。

ちなみに陸のお姉さんは、『Lesson!』シリーズの主人公、六華ちゃんです。

彼女はある意味、わたしの中で最強女子だったりします

あと、9月分に登場した美少女、空は 過去に某所に落としたお題小説の主人公だったりします。

気が向けば、それもこちらでも公開（後悔？）するかもです（^^）

【11月】 禁断の、サバラン ～side RIKU～

「ねえ、内藤。」

ホテルのケーキバイキングのチケット買ったんだけど、よかつたら一緒に行かない？」

学校の帰り道。

彼女が俺を呼び止め、言った。

突然の事に驚き、言葉を失う俺…。

すると紗和ちゃんは、少しだけ俯き それから顔を上げて。

「まあ別に、無理ならいいんだよ？」

チケットの有効期限が今日までで、美月も今日は 予定があるっていうし…。

だから、暇そうなアンタを 誘ってやったただけだから！」

彼女はひらひらとチケットをはためかせながら、不敵な笑顔を浮かべた。

…いつかとは、真逆のパターン。

それにしてもホント、なんてひどい言われ様だ。

…だけど、それでも嬉しいなんて思ってしまふ自分が、憎らしい。

でも今日は、ラッキーな事に、予定なんてもの全く入ってはいなくて。

だから俺は彼女の掌からすっとチケットを奪い取り、笑顔で言った。

「仕方ないなあ…。」

あんな高級なホテルに一人なんて、不安で仕方ないだろうからついていってやるよ。」

彼女は一瞬だけ、ハツとした表情で俺の顔を見上げたんだけど。

…すぐにつんと唇を尖らせ、不機嫌そうに眉間に皺を寄せて言った。

「…えらそうに。お供させていただきます、でしょ？」

その言葉を聞き、思わず俺はプツと吹き出してしまった。

でも俺は、彼女の機嫌を損ねて折角のお供役を外されても困るので、ここは素直に従う事にした。

「はいはい、お供させていただきますよ。紗和姫さま。」

笑顔で俺がそう言うと、彼女は呆れた様に笑った。

「ホント、調子がいいんだから…。じゃあ、4時に駅で待ち合わせでいい？」

調子がいい、か…。

まあ正直、変に警戒されても困るし、これくらいの扱いがちょうどいいなんて思っている自分もいるけど。

「うん、それでいいよ。じゃ、また後でな！」

俺がそう答えると、彼女はニコツと子供みたいに笑い、こくりと頷いた。

あまりにも愛らしいその姿に、またしても笑みがこぼれる。

それから俺は、彼女の頭をくしゃくしゃと撫で、言った。

「じゃあ、せっかくお洒落なところに行くんだから、今日はちゃんとおしゃれして来いよな？」

いつものトレーナーとかは、却下だからなっ！」

その姿もホントは、可愛くて仕方ないのだけれど、敢えてこんな憎まれ口を聞いてみる。

すると彼女は、いつものようにムツとした表情を浮かべ、キツと俺をにらみつけて言った。

「…分かってるわよ。」

ちゃんとした服くらい、持ってるってのっ！」

こんな事にムキになり、反論してくる紗和ちゃんは やっぱり可愛い。

それでも俺は、にやけそうになる顔の筋肉を引き締め、にやりと笑って続けた。

「へえ…。じゃあ、期待しとくとするよ。」

その瞬間、彼女は『しまった！』という様に、小さなうめき声を上げた。

それを聞いて、さすがに我慢の限界を超え、思わず腹を抱えて笑ってしまった。

…そんな俺の姿を、紗和ちゃんは 忌々しげに見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3216/>

My Sweet Darling?

2011年12月16日00時52分発行